

海岸での溺水事故の原因に関する計量的研究

渡邊 夏海

ライフセービング活動とは水辺の事故を未然に防止することを目的とした活動であり、よく知られているのは海水浴場での監視・救助活動であろう。現在の日本ではライフセービング活動が発展段階にある。全国の海水浴場ではライフセーバーが監視を行うようになってきてはいるが、ライフセーバーがいる海水浴場・いない海水浴場にかかわらず、毎年いくつかの海水浴場では溺水による死亡事故が起こっている。死亡や意識不明などに至らない溺水事故も含めると、2015年夏季はライフセーバーがいる海水浴場だけで3,163件もの溺水事故が起こり、救助が行われている。

本研究では、全国の中でも茨城県銚田市にある大竹海岸に調査対象を絞り、人が溺れたときの要素について調べる。離岸流の状況・波高・干満といった自然要因、浮具の有無・飲酒の有無・年齢といった人的要因と関連付けてより詳しい要素で集計を取り、どのような状況でどのような属性の人が溺れやすいのかを調査する。それによって得られた結果を活用し、共有することによってライフセーバーの監視に役立て、水辺の事故の防止に貢献したい。

溺水事故全体からの割合で見ると、10代・20代の遊泳者が多くの割合を占めていた。その中でも若い男性は、沖で遊んでいるときに多く溺水事故にあっていることが分かった。若い男性は浮具やボディボードといった浮力をもたずに遊んでいることが多いので、体力がある年代であるとはいえ注意して監視する必要がある。10代の男女は午前中に多く溺水事故にあっているため、特に注意して監視にあたるのが有効であるかもしれない。

また、10代の女性の溺水事故の要因は沿岸流が多くを占めているため、沿岸流が強い時には浮具を持っている10代の女性に注意したい。10代の女性に限らずとも、沿岸流や風が強い時は浮具やボディボードを持った遊泳者に注意するのが有効であろう。

また、ライフセーバーの中ではよく言われる「大潮の日は溺水事故が多い」であるが、本研究ではそのような結果は見られなかった。

ライフセーバーは長年の経験などによる知識を持って監視・救助活動にあたっているが、溺水事故に関する研究はほとんど行われていなかった。そのような意味では本研究は有意義な研究になったと思われる。今後はさらに傾向を読み取るために、よりサンプル数を増やすことが有効であろう。また、今回は調査対象地を大竹海岸銚田海水浴場に絞って行ったが、他の海水浴場についても同様に集計をとり比較することで、その海水浴場の特徴をつかみ、監視に役立てることができるとと思われる。

(指導教員 辻慶太)